

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.120

2014年6月25日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 帰郷／画・甲斐大策

滅びは「文明の無知と貪欲と傲慢」による

中村 哲

2013年度会計報告

ペシャワール会事務局

これまでも…これからも…中村哲医師とともに

五井泰弘

ふり返るとこれも縁か

柴田由紀子

96年から活動に参加事業の重責を負う

ジア・ウル・ラフマン

一運転手として25年、幸せを感じています

グラム・ナビ

宗教・人種・国籍を超えた病院だった

村井光義

とても大きなものの一であったことを実感

蓮岡 修

●カラー特集 ペシャワール会30周年特集 第4回 中村医師30年の歩み

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

滅びは「文明の無知と貪欲と傲慢」による 30年で世界は激変

2013年度現地事業報告

私たちは自然さえ科学技術で制御でき、不老不死が夢でなく、カネさえあれば豊かになれ、武力を持たば安全とする錯覚の中で暮らしています。そして世の中は、自然から無限大に搾取できるという前提で動いています。疑いなく、ひとつの時代が終わりました。カネと暴力が支配する世界は、自滅への道を歩んでいるように思えます。

PMS 総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

二〇一三年度を振り返って

ペシャワールに赴任したのが、ちょうど三〇年前の一九八四年五月でした。その後、ハンセン病診療からアフガン難民の診療、アフガン東部無医地区の診療所建設、大旱魃を機に水利事業が中心となり、現在に至りました。

まさかここまで来るとは、初め思っておりませんでした。その都度、逃げるに逃げられず、力を尽くしてきました。戦争、難民、飢餓、旱魃、そしてその渦中で生きる人々の生死……いろいろなことが鮮やかに思い出されます。その中には、言葉で描けぬことも沢山あります。

分かりにくいのは、私たちがとりまく情報空間そのものが人工的だからです。この壁は容易ではありません。とくに戦争や政治などの事象が、いかようにも情報を加工して虚像を生むことを知りました。

それでも、敢えて声を大にして伝えたいのは、今も現地で進行する気候変化＝大旱魃です。私たちが包む自然について目をそらすことは、もはや限界に近づいていると考えます。アフガニスタンは戦争で滅びません。旱魃で滅びます。もっと正確に言えば、自然を無視する「文明の無知と貪欲と傲慢」によって滅びます。

この三〇年で、日本と世界も大きく変わ

りました。アフガンで起きたことは決して他人事ではありません。この間の象徴的事件では、ソ連の崩壊（一九九一）、同時多発テロとアフガン侵攻（二〇〇一）を間近に経験し、日本では東日本大震災（二〇一一）がありました。経済的には米国で金融破綻、EU圏の東方拡大と周辺国の凋落、中東の混乱、アジア世界の急速な工業化、アフリカの大規模開発が同時期に起きています。今思うと、アフガンの悲劇が世界的な激変の余波であったことに思い当たります。

私たちは自然さえ科学技術で制御でき、不老不死が夢でなく、カネさえあれば豊かになれ、武力を持たば安全とする錯覚の中で暮らしています。そして世の中は、自然から無限大に搾取できるという前提で動いています。疑いなく、ひとつの時代が終わりました。カネと暴力が支配する世界は、自滅への道を歩んでいるように思えます。

この中であって、「文明の辺境」で見える悠然たるヒンズークツシユの純白の山並みは、私たちに別の道を告げるようです。バスに乗り遅れまいと急ぐ必要はありません。たかだか数万年、僅かな時間、地上に生を許された人間です。動かぬ現実、逆らえない摂理と自然の中で、身を寄せ合って生きていることです。

変転する世情から距離を置き、動かぬものを求め、三〇年を現地で過ごせたことを

天に感謝します。この事業に賛同し、様々な立場から支え続けてきた日本とアフガニスタンの良心と真心に感謝します。

そして戦争と飢餓で逝った無数の犠牲者の冥福を祈ります。これを節目に、改めて「緑の大地計画」の完遂と意義を訴え、人としての節を全うしたいと思えます。

二〇一三年度の概況

気候変動と自然災害

インダス河流域で二〇一三年に発生した大洪水は、二〇一〇年を上回る規模のものであった。ヒンズークツシュ山脈南麓では、五月下旬から断続的、かつ長期に降雨があり、カプール河本川、クナール河流域の各地で溢水して決壊、数百名が犠牲となった。

六月、ジャララバード市内が浸水、クナール河流域の作業地でも、大規模な砂州移動と河道変化が発生した。これまで築いてきた各取水堰・堤防のうち、カマ堰と対岸付近に被害が集中した。洪水は八月まで断続的に起き、PMSでは全取水堰と護岸の改修を迫られた。

ジャララバード南部穀倉地帯（スピンガル山脈北麓）は早くから渇水に悩んでいたが、二〇一四年一月、ソルフロッド郡の農

業生産壊滅が伝えられ、人々の間で危機感が高まった。前後してアフガン北部のバダクシヤンで大きな地滑りが起き、数百名が犠牲となった。

こうして荒廃してゆく農村から大都市に逃れる者が後を絶たず、失業者があふれ、社会不安の一大要因を成している。

外国軍撤退と無政府状態

大統領選挙をめぐる混戦が続いた。治安が過去最悪となる中、欧米軍の撤退が進められた。一四年六月現在、五万数千名のISAF（国際治安支援部隊）が残っており年内完全撤退をめざし、続々と引き上げている。外国兵の戦死者は三千数百名とされているが、アフガン国軍・警察や民間人の死者はこれをはるかに上回ると見られている。

一三年の外国兵の戦死者は減少しているが、これは犠牲者が減ったということではない。外国兵の数が往時の三分の一に減り、基地外に出る機会を少なくしたからで、無人機攻撃は収まる気配がなく、誤爆、内紛工作らによるアフガン人の死傷者はむしろ増加している。

一四年四月に行われた大統領選挙には、混乱にも拘わらず多くの住民が投票に参加した。最終結果が六月中に明らかとなる。長い戦乱に疲れた人々は、決して多くを期

待していない。最低限「治安回復と身の安全」が願いである。

国境付近では、米軍によるミサイル攻撃がパキスタン領内から行われ、パキスタン政府、米軍、アフガン政府との間で緊張が高まっている。和平交渉では、一一年以後、米軍がタリバン代表と直接交渉してきている。捕虜交換もアフガン政府抜きに行われている。米軍駐留をめぐる議論があり、政情は先行きが見えない。

危惧される撤退後の欠乏

我々が危惧するのは、撤退後の欠乏であ



低空飛行する軍機。PMSの水路工事現場上空は軍機の飛行路線である

る。食糧自給率は既に半分以下に落ちており、農業生産は低下の一途をたどっている。元来アフガン国民のほとんどが農民である。早魃は収束していない。何とか凌げたのは、軍事活動と海外援助による莫大な外貨流入で、国外から食糧を買えたからだ。それがなくなれば、国民の半分が飢えることになる。

戦争の罪は殺戮だけではない。実質的な生産よりも現金収入が重視され、消費が徒に煽られたからで、この十年で貧富の差が著しく拡大した。ある意味では、戦争以上に危機的状況を覚悟せねばならない。外国軍が去っても、アフガン政府は経済支援に頼らざるを得ず、諸外国から容易にコントロールされる危険性を抱えている。

PMS事業の概況

大洪水の後始末で、主要な各取水堰の抜本的な改修と護岸の強化が行われ、「緑の大地計画」の頂点と見たマルワリードIIカシコート連続堰が完工した。これによって、PMSは一つの「取水技術体系」を完成したと思われる。今後、作業地域の完全な安定灌漑が実現すれば、復興というよりは「生存する方法」が実証できる。計画は総仕上げの段階に入った。

この気候変動は並みのものではない。農

地の沙漠化は止まるところを知らない。我々は取水技術(PMS方式)の拡大を提唱する。少なくとも東部アフガンの大川沿い(カブール河本川、クナル河)で相当な成果を上げ得ると信ずる。(詳細を次号で紹介予定)

マルワリード用

水路は本格的な維持保全態勢の確立に力が注がれた。ガンベリ沙漠は四年を経た防砂林が効果を表し、ようやく農業生産に力を入れ、開拓事業が軌道に乗ろうとしている。

ダラエヌール診療所は従来通り運営され、地域で重きをなしている。PMSは全体的に、勤儉節約を徹底、将来への自立を目指しつつある。

1. 医療事業

一三年度の診療内容は別表の通り(別表1)。

一三年四月、職員宿泊所を診療所敷地内に建設した。感染症と小外科が多いが、菌検査や消毒措置など、基本的な技術は良く

別表1 2013年度診療数及び検査件数

国名	アフガニスタン	
地域名	ナンガラハル州	
施設名	ダラエヌール診療所	
外来患者総数	52,219	
【内訳】	一般	42,541
	ハンセン病	24
	てんかん	486
	結核	193
	マラリア	4,249
	外傷治療総数	4,726
入院患者総数	—	
検査総数	12,401	
【内訳】	血液一般	725
	尿	2,842
	便	3,662
	らい病塗沫検査	1
	抗酸性桿菌	205
	マラリア	4,216
	リーシュマニア	322
	その他	428

2. 灌漑事業

受け継がれている。猖獗しょうじやうを極めたマラリアは患者数が激減している。おそらく、栄養状態の改善と共に、流行が慢性安定期に入ったためと考えられる。

主な工事は別表2の通り。一三年度は、大洪水の影響で過去最大規模の河川工事が行われた。

◎カマ取水堰と対岸の護岸

「緑の大地計画」の中で最大の人口を擁するカマ郡(約三〇万人・七千鈔)を潤す二つの取水堰を改修・強化すると共に、対岸ベスード郡の護岸工事とタプー堰の改修が行われた。

別表2 2013年度上半期・下半期経過 (= JICA 共同事業、 = PMS 単独事業、 = 未定)

		上半期の経過	下半期の経過
ベスード郡	ベスード第一堰	大洪水後の改修	改修工事終了
	ベスード護岸(カマ郡対岸)維持	始点150mの決壊・改修	全工事を完了
		1700m地点の決壊・補修	
		2500m地点(しめきり堤)の強化	
	タブー堰	河道再生	
ベスード第二取水堰	調査中(洪水で崩壊)	再調査を開始	
カマ郡	カマ第一取水堰	河道変化による部分崩壊	河道回復と全面改修完了
	カマ第二取水堰		
カシコート	カシコート連続堰	河道変化の観察と対策	完工
	サルバンド村(堰の上流)護岸	石出し水制による強化	完了
	主幹水路(2km)上段部の造成	進行中	完工
		沈砂池(調節池)造成	
	既存水路の拡大(9.8km)	調査中	連結部完工
	女子校舎(8教室)	待機中	工期延長
マルワリード	シギ分水路(シギ下流)	260m洪水路横断サイフォン完工	マルワリード取水量を増加
		分水路(計2km)完工	
	シギ取水堰(シギ上流)	洪水で崩壊、臨時取水路造成	堰建設中止(基礎地面消失)
	カンレイ・クナデイ村揚水水車	試験設置	2ヶ村に設置完了
	ガンベリ開拓	オリーブ園造成	継続
		水稻栽培の増加	
		防砂林の拡張	
固有植生の育苗			
	排水路拡張		
ダラエヌール	診療所	医療職員宿舎完工	特記なし

クナール河は相当な暴れ川で、予期せぬ事態が頻発する。大洪水に伴う砂州と河道の変化は想像を超えるものがあつた。分割した河道の一部に土砂が堆積して閉塞され、逃げ場を失った大量の流れが、堰を部分崩壊させていた。結局、カマ第二取水堰を新設に近い形で強化し、河道を再分割して中心へ主流を集め、土砂堆積で堰付近の河道が閉塞されぬよう、工夫が凝らされた(会報二〇一三年、一一八号参照)。

◎カシコート＝マルワリード連続堰

既に前年度、大方の工事を終了していたが、カマ堰と類似の変化で部分的に決壊していた。予測されたことではあつたが、上流の経年的な変化から動向をつかみ、最終工事が行われた。堰長五〇五m、堰幅五〇～一二〇m、石張り堰の総面積は約二万五千㎡の長大な堰が一四年三月、二年がかりで完工した。

上下流の護岸三・五kmを併せ、PMSの手掛けた取水堰としては最大の難工事となつたが、これによって、PMSの提唱する「取水システム」の中で最も困難な取水堰の完成度が高くなった。小さな改修はあるが、もはや大禍は当分ないと見ている。

◎カシコート用水路の開通

主幹水路(約一・八km)は一三年夏、既に送水を始め、両水路壁上段部の蛇かご造

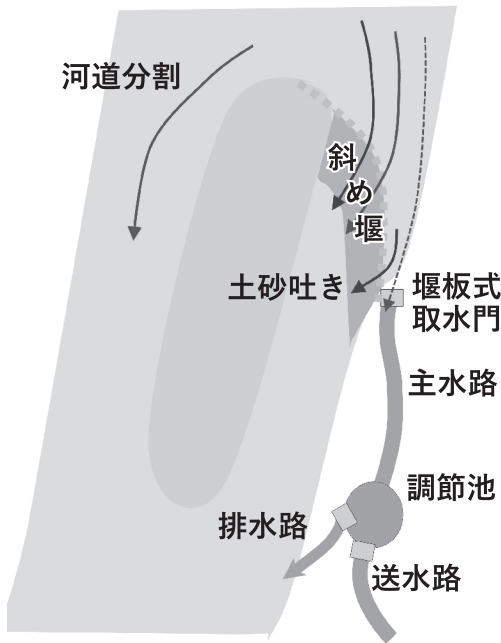
別表3 取水方式の比較

	PMS方式	従来方式
自然河道の堰上げ	斜め堰・土砂吐き	単純突堤
取水口	堰板式の取水門	取水門なし又はスライド式水門
主幹水路底	ソイルセメント・ライニング	素掘り又はコンクリート三面掩蔽
水路壁	蛇籠工と柳枝工	
余水吐きと排水	調節池で底水を排水	主幹水路壁の一部から溢れさせる

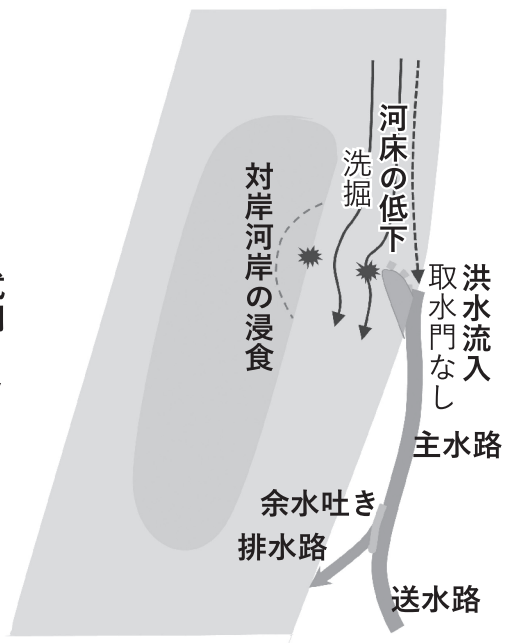
別表4 設置用水水車の比較

	直径	重量	揚水高	バケツ数	バケツ容量	回転時間	設置場所	一日揚水量
			水路床面から					
一号機	4.0m	約220kg	3.5m	32個	9リットル	15~18秒	クナディ村	1,300~1,600トン
二号機	6.0m	約260kg	5.6m	32個	9リットル	18~20秒	カンレイ村	1,200~1,350トン

PMS 提唱の取水システム



従来の取水システム



成と柳枝工が進められた。既存水路との連結部が鉄砲水の通過地点であったため、30mのサイフォンを含む約200mの送水

し、上流域は水量調整が可能な取水堰を建設する予定であった。下流域については、一三年六月までに全

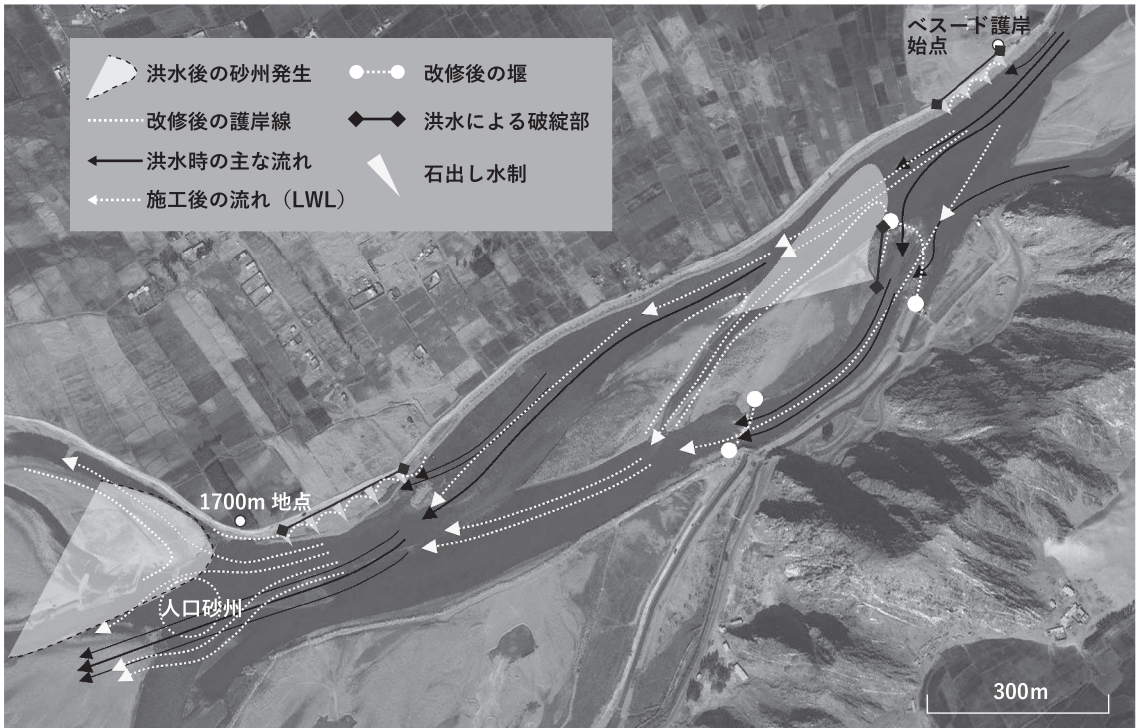
路を新たに延長した。また堤防建設と排水路の造成で新たな耕地が拓かれるため、沈砂池(調節池)に送水門を加えている。一四年九月までに全工事が終了する。

しかし、取水量(毎秒三〜五トン)に比べ、既存水路の容量が小さく(毎秒一〇〜一・五トン)、末端まで潤せる送水量ではない。これまで順番制で灌水してきたが水稻栽培は不可能である。PMSでは、既存水路約九・八kmの拡張を計画している。

◎シギ地域の安定灌漑

シギ地域は半沙漠の荒野と湿地が混在し、面積の割に生産性に乏しかった。PMSでは一二年三月に計画を実施、マルワリード用水路末端から約二六〇mのサイフォンで大きな洪水路を横断してシギ下流域を潤

路を新たに延長した。また堤防建設と排水路の造成で新たな耕地が拓かれるため、沈砂池(調節池)に送水門を加えている。一四年九月までに全工事が終了する。



カマ堰・ベスード護岸の主な改修（2013年6月より2014年2月）

長約2kmの送水路（マルワリード延長路）を完成させたが、上流域は悲劇的な事態に遭遇した。一三年六月～八月、断続的に襲った洪水が、調節機能のないシギ取水口に流入、取水口から同用水路約二・七kmまで侵入、約六〇分の耕地もろとも濁流に消えた。このため十月に予定した工事は不可能となり、急ぎょマルワリード用水路一三km地点から分水して潤している。

◎揚水車の設置

マルワリード用水路流域では、ポンプで揚水しなければならぬ村落がいくつかあった。ガソリン燃料は高価で、とても貧しい村落では手が出ない。長い懸案であったが、一三年度になって着工された。福岡県朝倉市の水車を模したもので、二カ所に設置された。製作はPMS独自に行った。

詳細は別表4の通り、一日揚水量一二〇〇～一六〇〇ト、二つの村が恩恵を受けた。水稲は無理だが、小麦やトウモロコシなら数十分を潤し、村民の自給を保障した。

3. 農業・ガンベリ沙漠開拓

◎植樹と砂防林の効果

ガンベリ開拓地の悩みは突然襲う鉄砲水と砂嵐であった。このため、二〇〇八年秋に沙漠横断水路の建設開始と同時に、砂防林の造成が進められてきた。植林は主に乾燥に強い紅柳（ガズ）が使われ、開拓地を囲むように全長約五km（岩盤周りを含むと計七km）、幅一〇〇～二〇〇mで植えられた。

五年を経て、ようやくその効果が表れ始めた。紅柳は高いもので十数mに成長、激しい砂嵐を避けただけでなく、鉄砲水も樹林をくぐる間に大人しくなり、破壊的な被害はなくなった。草地の拡大と相まって、厳しい沙漠の熱風も、樹間をくぐる涼風となり、土地が保水性を増して作物に好影響を与えるようになった。

◎ガンベリ農場の増産

これを受けて一三年度は「食糧増産・自給態勢確立」を合言葉に、耕作地を飛躍的に拡大した。コメ、コムギらの穀類、柑橘類、ザクロ、モモ、ブドウらの果物、野菜、豆類、オリーブなど、ほぼ職員の自給を満たしつつある。小規模ながら畜産も始めら

別表5 植樹総数(2003年3月から2014年3月まで)

種類	場所	2003~07年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年(3月)	総計
ヤナギ	水路の両岸	116,050	55,380	97,380	60,750	73,315	23,650	37,073	18,400	481,998
クワ	水路沿い土手斜面	7,000	2,750	8,578	4,430	140	292	0	0	23,190
オリーブ	水路沿い土手斜面、ガンベリ	2,000	0	840	0	0	0	1,424	1,275	5,539
ユーカリ	河川護岸とガンベリ砂防林	2,500	1,000	11,478	39,584	22,350	28,196	7,150	6,220	118,478
ピエラ	ガンベリ沙漠	0	300	600	1,165	165	2,083	175	75	4,563
紅柳(ガズ)	ガンベリ沙漠とE区域	0	15,100	71,300	14,356	9,887	22,317	3,573	780	137,313
シーシャム	護岸およびガンベリ用水路沿い	0	0	0	0	0	0	4,614	1,400	6,014
ポプラ	ガンベリ農場	0	0	0	4,900	10,786	1,850	0	220	17,756
イトスギ	モスク、マドラサ、ガンベリ公園	0	0	0	60	195	300	0	0	555
果樹	PMS果樹園	600	0	0	193	0	6,034	5,283	6,151	18,261
その他		0	0	0	132	190	412	144	50	928
		128,150	74,530	190,176	125,570	117,028	85,134	59,436	34,571	814,595

れ、乳製品が生産されている。

新たに造成されたオレンジ園やオリーブ園を入れると、農地は約八〇鈔を超える。事務所内に「農業部」を置き、集荷された収穫物を職員に分配する仕組みが導入された。将来的にPMSの独立態勢をめざし、皆の士気は高い。

◎農業協力の結論

「緑の大地計画」の柱の一つであった農業協力は、幾多の試行錯誤を経て支援の方法を会得したと言える。アフガン農業の特性は、商品性でなく自給性を重視、地域の自然循環の営みに位置づける点である。

数百年、数千年の時間をかけて成った農業は、既に確立された伝統技術と文化である。PMSの目指すのは、新技術の導入ではなく、「復元」に近い。実際、アフガン人は全て有能な農業技術者であり、勤勉な農場経営者でもある。我々が持ち込んだもので例外的に成功を収めたのはアルファルフアの普及だけで、かれらが述べるように、「水と土さえあれば生きられる」。農業生産は、全て彼らの流儀で行われるようになった。単位面積の収量が多少落ちても、彼らは「自給性」を重視する。肥料も自分で作り、化学肥料は最低限に抑える。それで自活できれば、外国人がとやかく指導することはないと我々は考えている。

なお、一三年一月から十二月までの植樹



今年5月に収穫し脱穀直後の麦。「カネがなくとも食べる」がアフガン農村の本領だ(中村)

は五九、四三六本で、〇三年から一四年三月までの総植樹数は八一万本を超えた(別表5参照)。半分以上が水路や護岸沿いの柳枝工に使われたヤナギで、次に防砂林の紅柳やユーカリが多い。最近の傾向はシーシヤムらの土着種、果樹が少しずつ増えている。

◎「ガンベリ村」発足に向けて

ガンベリ開拓地(約3km四方、九〇〇鈔)には、周辺から様々な集団が移住して「棲み分け」が進んでいる。最も有力なのがケシユマンド山系から移住してきたパシヤイ族の集団で、クナール州、ローガル州から

のパシユトゥ族、定住化した遊牧民、隣接するシギ・シェイワ村落住民と、雑多である。一四年一月、各集団が一堂に会し、今後が協議された。

これによってPMSは、より組織的に給排水路の整備を進めると共に、「ガンベリ地域共同体」の一角を占め、「土着化」の道を選んだ。他方、PMS農場(約二〇〇畝)を合法的に得るべく、「四〇年間借用」の契約が行政との間で取り交わされた。今後、PMSの事業を介して地域がまとまり、安定した農村共同体ができてゆく過程にあると考えられる。

合法性を維持するため、ガンベリに近いベスード郡の一角に職員居住地を「PMS私有地」として確保、計画は徐々に進められている。

4. ワーカー派遣・その他

一三年度は、現場に中村一名が常駐、ジャラバード事務所に村井・石橋の二名が赴いた。

カシコート・サルバンド村の女子校舎は、緊急の河川工事が再び難航し、治安の悪化で近づけず、着工延期を余儀なくされた。

二〇一四年度計画

年度報告に述べた通り、一四年度も「緑

の大地計画」実現へ向けて更に努力は続く。マルワリード用水路関係では、農地開拓、小水利施設、給排水路整備、植樹ら、基本的にこれまでの連続だが、全体に農業生産に大きく移行する。

河川・用水路工事では、

- ・ベスード第二取水堰(ミラーン地区)
- ・カシコート既存水路九・八kmの拡張
- ・ベスード郡タプー堰の改修
- ・ガンベリ開拓地の排水路整備

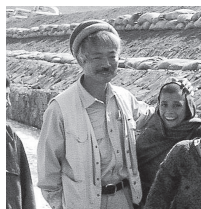
以上が成れば、ほぼジャラバード北部穀倉地帯全域の安定灌漑に見通しをつけることができる。

最大のものがベスード第二取水堰で、何とか一四年十月に着工し、一六年三月までに完工したい。とくに調節機能のない取水がいに危険か、シギ堰で痛感した。既に一四年五月までに工事に必要な調査と測量を完了した(詳細を次号で紹介)。

カシコートは現在、国道上の治安が悪く、数年をかけて少しずつ進める。女子校舎建設は、その段階で予定している。

別表6 2013年度現地派遣ワーカー

	職種	赴任日
1	村井光義 事務・現地連絡員	2005年3月～
2	石橋忠明 事務・現地連絡員	2014年2月～



中村 哲：九州大学医学部卒。専門は神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て、

一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州(旧北西辺境州)の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保(井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百カ所以上)事業を実践。さらに〇二三年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。ダラエヌール診療所の年間診療数約五万二千人(二〇一三年度)。

2013年度の主な収支

期間 2013年4月～2014年3月

'13年度会計報告

一般会計(単位:円)

[収入の部]

1 会費・寄付	247,334,121 ①
2 補助金等	0
3 利息雑収入	616,631
4 収益事業収入	930,719
5 基金取崩	0
年度収入計	248,881,471
前年度繰越	51,611,646
収入計	300,493,117

[支出の部]

1 現地協力費	143,409,326
うちPMS運営費	0
アフガン事業費	134,817,225 ②
ワーカー費	399,615 ③
渡航費	5,546,998
国内活動費	2,645,488
2 広報費	7,972,961
3 事務局費	17,324,154
年度支出計	168,706,441
基金への繰入	80,000,000
次年度繰越	51,786,676
支出計	300,493,117

- ① 会費寄付(個人17,489件/団体657件)
- ② 農業用灌漑用水路建設等
- ③ 現地支援ワーカー等
- ④ カレンダー印刷、写真使用料、送料収入
- ⑤ 事業所税等

収益事業会計

[収入の部]

書籍売上	3,263,755
DVD売上	1,571,675
雑収入	636,950 ④
売上収入計	5,472,380

[経費の部]

書籍等原価	3,700,111
販売費	492,750
事業所税等	348,800 ⑤
経費合計	4,541,661
収益事業収入	930,719

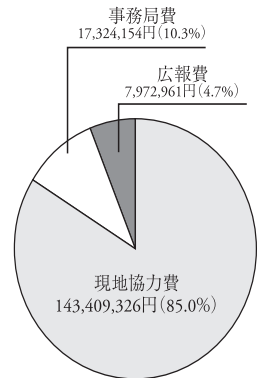
「いのちの基金」残高

期首残高	270,000,000
一般会計から繰入	80,000,000
期末残高	350,000,000

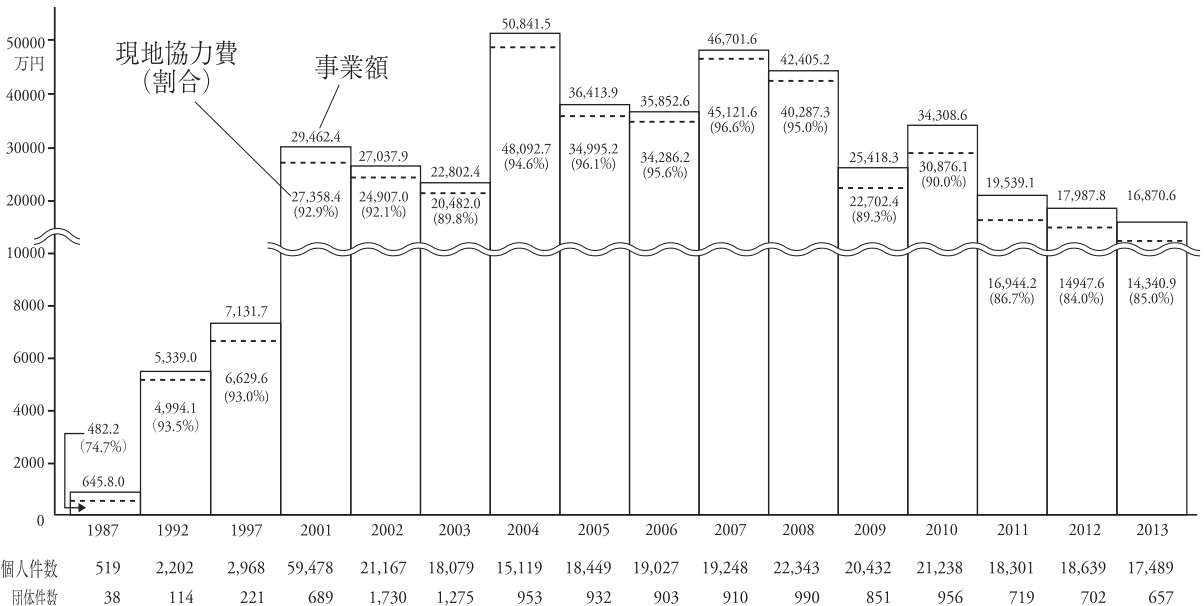
未使用切手、書き損じ葉書の寄付	
寄付いただいた件数	1,044件
未使用切手枚数	34,616枚
同 金額	4,263,976円相当
書き損じ葉書枚数	30,221枚
同 金額	1,339,203円相当
合計金額	5,603,179円相当

*会報発送費用の節約になっています。

●2013年度事業額(支出ベース)
168,706,441円



事業規模(会費・寄付件数、事業額)の推移 1987～2013(年度)

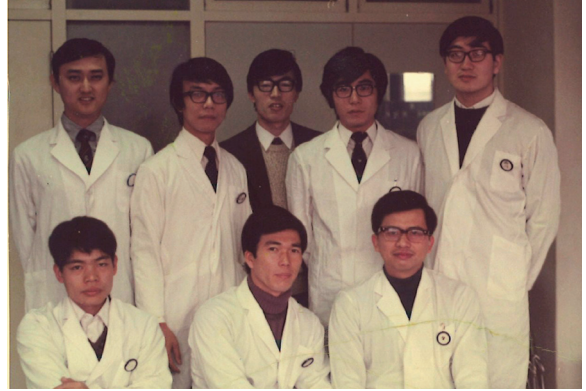


【カラー特集】 ペシャワール会30周年特集 第4回 中村医師30年の歩み



上:虫捕りに夢中だった少年期

右:1984年5月、ペシャワールミッション病院のハンセン病棟から始まった現地活動



上:医学生時代(前列左)



パキスタンのアフガン難民キャンプで診療中の中村医師とJAMS職員(1980年代)



3000mの峠を越え、パキスタン北西山岳地に診療所開設の準備をする(1995年)



パキスタン北西の山岳地ラシト診療所から更に北部へ移動しての巡回診療(1997年)



PMS 基地病院で現地医療従事者を指導(1999年)



マルワリード堰の先端へ重機を誘導する中村医師



河に突き出す堰の先端へは用心して、なかなか前進しない運転手に率先して同行する(2003年12月)

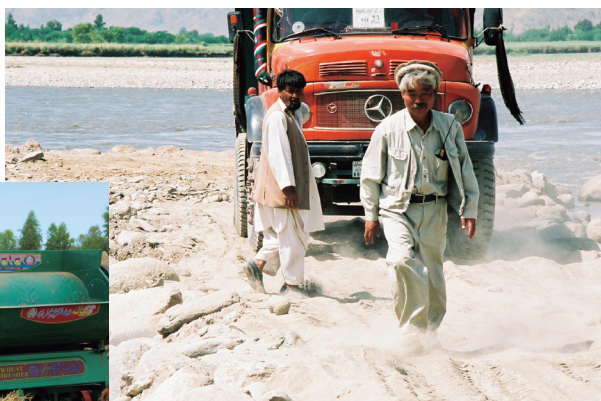


掘削機の修理をする中村医師と石橋ワーカー(2004年3月)



筏でクナール河を渡り、灌漑水路建設現場へ向かう(2012年12月)

下:PMSガンベリ農場でとれた麦の脱穀(2014年5月)



上:石出し水制造成中。後ろはモクタール運転手(2007年4月)

右:パキスタンで買い付けた中古のローダー「丸鉄組」とは縁か。マルワリード堰の為に巨石を運ぶ(2004年)



◎ペシャワール会発足30周年記念特集 第四回

これまでも…これからも…
中村哲医師とともに

ペシャワール会理事・名古屋支部長

五井泰弘

新たなはじめ

ペシャワール会三〇年、中村哲医師そしてこれを支えてこられた全国の会員の皆さん、事務局の皆さん、長い間大変ご苦勞様でした。この時間、一言で語れない苦勞の連続だったものと推察します。しかしまだ一区切り、更なる始まりの一步であり「アフガン東部から全土に緑の大地」を合言葉に進まれん事を希望します。中村先生の一層のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

故・村井瀨一さんと中村先生

名古屋にペシャワール会ができたのは、一九九六年のことで十八年前になります。福岡の支部として発足したもので全国初の支部結成だったと記憶しています。早くから活動してきたのは村井瀨一さんの役割がとて大きかったと言えます。その村井さ

んも四年前の二〇一〇年三月、九二歳で亡くなられました。最後まで中村先生への氣遣い、ペシャワール会への想いを口にしていました。

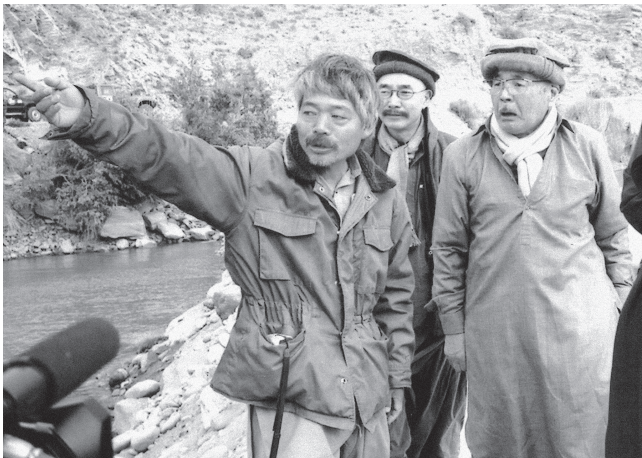
以前、その村井さんから伺っていた中村先生との出会いを少しお話しします。今から遡ること二九年前の一九八五年五月、名古屋サウスライオンズクラブの村井さんや小寺孝雄さん（九五歳・ご健在）ら四名の同クラブの方が難民支援の募金を現地の人に渡す目的でパキスタンを訪れていました。各地を周りながらペシャワールに着いた時「こちらに日本人がいる」と現地の人から聞き「えっ、こんな所に」と思い、早速行ってみるとその日本人とは中村先生だったのです。その時中村先生はペシャワール・ミッション病院に赴任して間もない頃で、奥さんと小さいお子さんが一緒に、難民の診療活動をされていました。「こんな遠い地で頑張っている人がいる、驚いた、涙が出た」と熱く語っていたのを今でも鮮明に覚えています。

それを機に中村先生、村井さん、ライオンズクラブの関係は深くなり、今日まで三〇年弱、物心両面に亘り支援を頂いています。今ではアフガンで唯一残るダラエヌー

ル診療所は同クラブにより建てられたもの、四輪駆動トラック数台の寄贈、PMS病院建設の寄付、近くは診療所屋上に太陽光発電パネルの寄贈などがあります。中村先生もペシャワール会初期の時期での援助だっただけに「心強かった」と著書の中でも触れておられます。

熱き思い

私がペシャワール会に関わったのは名古屋支部結成の準備段階の時からで、二〇年程になります。その時のきっかけも故・村



2003年12月、用水路現場を視察する村井瀨一さん(右、当時86才)

井瀨一さんでした。ある日「会いたい」と村井さんから電話が入り、私の会社近くにある「東鯨本店」という老舗の寿司屋で昼食を取りながら話を聞きました。

それまで村井さんとの付き合いは多くなく、日中、日ソ友好など社会運動をされている方としか知りませんでした。その頃、私はソ連のアフガニスタン侵攻に反対して「アフガン連帯愛知委員会」の活動をしてきた事もあり、会いに来られたのだと思います。で、話とは「中村先生のような人を支援したい、助けてい」というもので、最初は「大きな事を言う方だな、大風呂敷を広げて」と思いました。が、熱血熱涙、溢れんばかりに「名古屋でペシャワール会を

ふり返るとこれも縁か^{えにし}

ペシャワール会熊本連絡会

柴田由紀子

ペシャワール会熊本連絡会が発足して一〇年以上がたちました。ペシャワール会の三〇年に及ぶ中村先生の現地活動支援の中では新参者で、活動のほんの一端を担っているだけで、おこがましい気持ちもします

つくりたいので手伝って欲しい」と。声の大きさに圧倒され、私は「わかりました」と考える間もなく即答したのを覚えています。その時は「早まった」と思いましたが、今では感謝こそすれ後悔は全くしていません。これも生前の村井さんが常々言われていた「袖触り合うも他生の縁」だったのです（中村先生も時々使われますが……）。その遺志をしつかり受け継いでいかなければと、改めて思う次第です。

名古屋の活動

名古屋の事を少しばかり紹介します。支部が発足した名称をその後「ペシャワール会名古屋」に変更しましたが、組織上は変

が、これまでの活動の報告を兼ねて寄稿させて頂きました。

1 ペシャワール会熊本連絡会の誕生

長らく福岡で暮らしたあと、夫の最後の赴任地広島から熊本に転居してまもなく、二〇〇一年の半ば、ある日突然中村哲先生からお電話があった。その後しばらくして中村先生と事務局長の村上先生が熊本まで足を運ばれ、支部の立ち上げの要請を受けた。熊本ではすでに、ある教会の中に支援団体があったが、諸事情により新たに作る必要があったようだ。夫は中村先生とは大

わりません。主な活動は①本部が年四回発行する会報発送の一部をお手伝いする形で中部エリア（東海、北陸、上信越）一〇県に発送作業をしています。②二〜三年に一度、中村哲医師現地報告会や写真展などを開催する。③中学、高校、市民団体からの講演依頼には積極的に出掛けペシャワール会の活動を広めるなどです。事務局員は総数一七〜一八名で行っています。

最後に名古屋サウスライオンズクラブ、金城学院高校、歯科技工士会、静岡県人会など多くの方々、また連携する豊橋（愛知）、岐阜のペシャワール会の支援会や各市民団体の皆さんにこれまでのご協力に感謝申しあげます。

学の同級生で、頼まれたことは二つ返事で引き受ける性格だが、私はとても心配だった。ともかく弊院を拠点に夫・柴田堅一郎を会長に、数名のスタッフで「ペシャワール会熊本連絡会」が発足した。

2 ペシャワール会への一本の糸

ふり返るとこれも縁だったかなとふとそんな気もしてくる。

初代事務局長の故佐藤雄二さんは私と高校で同じクラス。そして高校で私が作った詩が、「パキスタンの夢」。パキスタンに行つて人の役に立ちたいという詩だった。苦

笑だ。

暮れゆく直前のテニスコートの風景に異国情緒を刺激され、上達しない不甲斐ない自分への感傷と混じったのだろうか。どうしてパキスタンなのか、今も不思議。

また、中村先生のベシヤワールのミッシヨン病院への赴任を推薦した宮崎信義先生の奥様、智子さんは大学で私と同じ学部、彼女は一二年前他界されたが、私にとって忘れられない案内人だ。四十年以上前の大学紛争只中、キャンパス内でデモをして医学部の玄関前で座り込みをしたとき、隣にいた彼女が発した「てっちゃん」という言葉がずっと耳に残っていた。それから月日が経って、新聞でベシヤワール会の発足、中村先生の赴任の記事を読んだとき、ああ

中村哲【最新刊】著者初の自伝！

自然と人間、人間と人間の根源的なかかわりを問い直す

天、共に在り

アフガニスタン三十年の闘い

四六判上製26ページ（内カラー4ページ）

定価・本体1600円十税

この人が「てっちゃん」だと直感した。

初めて中村先生にお会いした時、予想に大いに反して穏やかな優しい風貌に驚いた。そして、「滝沢克己先生」の一粒の麦が中村先生の中に不動の一本としてまっすぐ生きているのを確信した。故滝沢先生は九大文学部の哲学の先生で「人間の原点」を主題に自主ゼミを開講されていた。

3 活動報告

発足早々、アメリカ同時多発テロが勃発し、アフガニスタンへの報復空爆が始まった。一〇月二六日、急遽、帰国された中村先生の緊急報告会を熊本市総合女性センターで開催、夜間にもかかわらず、約四〇〇名の方が来場され、廊下まで人があふれ

た。消防法に引っかかるとセンターから後日お叱りを受けた。

これを機に中村先生の活動が人々に注目されるようになり、現地活動は「用水路建設」など常識を遥かに超える大事業に発展していき、それに伴い連絡会も活発に動き出した。

毎年、中村先生をお招きして報告会を開催、また不定期に定例会、年四回一〇名程のスタッフで会報発送をした。

当初、報告会の会場は熊本市総合女性センターの多目的ホール、年毎にだんだん参加者が増え、約二〇〇名入れる円形の会場は心配をよそに、ちょうどいい具合に埋まった。毎回、中村先生と熊本に縁の深い事務局長の福元満治氏のお二人をセットでお招きし、福元氏は先生のエピソードなどもお話ししてくださり、玉井金五郎氏、火野葦平氏などの話で会場は盛り上がった。

しかし、発足から四年の間に仕事を分担していたスタッフが次々転勤や病気でいなくなり、すべての仕事が私の肩にかかってきた。パソコンは初心者だったが、そのうちワードを使って未熟ながらポスターやチラシを作り、また機械音痴の私がビデオの編集まで。必要にせまられると、凡人なりに出来る力を神様は与えて下さるものだった。

チラシや当日配布するパンフレットを自

第一部 出会いの記憶 1946～1985

第二部 命の水を求めて 1986～2001

第三部 緑の大地をつくる 2002～2008

第四部 沙漠に訪れた奇跡 2009～

NHK出版

〒150 東京都渋谷区宇田川町41番1号

電話：03（3464）7311（代）

FAX：03（3780）3353

分で作ったのは、現在進行形の現地のホットな情報を皆様にお伝えしたいと思ったからだ。それともう一つ、若い人に、目には見えないけれど、これからの人生にきつと力を与えてくれる「中村哲学」に触れて頂きたいという願いも強くあった。先生の著書の販売もその思いだった。

二〇〇六年以降の報告会については省略する。

4 これから

長い間、中村先生の報告会に携わってきたが、アフガンが子ども達の笑顔でいっぱい

いになって、また、先生がシヨベルカーを降りられたら、百歳も二百歳も長生きして頂いて、今度は絵本を片手に小学生や中学生を相手に講演してほしいと「アフガンの夢」を見ています。

私達の時代は共感する仲間がいました。しかし今は「王様は裸だ」と叫ぶ純真な子ども達は、幼くして不条理をたった一人で闘わなくてはならないのが現実です。思春期を迎えることなく自死する子、かろうじて生きのびた子も自己肯定できずその後の道は平坦ではありません。先生のメッセージは子ども達が生きて行く為の光になるで

しょう。

さて、熊本連絡会は今後の活動を思案中、若い人達にバトンタッチができることを願っています。ご連絡をお待ちしております。

最後になりましたが、報告会、写真展にご協力くださった皆さんのボランティアの方々、ご支援くださった皆様、また、発足から今日まで熱心に御協力くださいました熊本日日新聞社に御礼申し上げます。夫のおかげでペシャワール会のお手伝いが少しでもできたことは幸せです。

◎現地スタッフからの便り

九六年から活動に参加 事業の重責を負う

PMS副院長・ジャララバード事務所長

ジア・ウル・ラフマン

私、ドクター・ジア・ウル・ラフマンは、一九九六年六月にペシャワールのPMSジャパンに加わり、ドクター・サブ中村の下で二〇〇八年まで様々な役職につきました。その後二〇〇八年六月にPMSの

ジャララバードオフィス事務所長としてペシャワールからアフガニスタンに赴任しました。ペシャワール時代は、ドクター・サブと共にPMS病院で外来患者とくにハンセン病患者の診療にあたりました。PMSはパキスタンのチトラルのラシユトとコーヒスタンにハンセン病診療所を二カ所持ち、アフガニスタンではヌーリスタン州ダラエワマ、クナール州ダラエピーチ、ナンガラハル州ダラエヌールの診療所で地元住民に二四時間診療を提供していました。我々の活動は全てドクター・サブの支援

と指揮監督によるもので、スタッフは以下の事業に従事しています。

◎医療部門…PMSは現在も活動中のダラエヌール診療所で外来診療、各種検査、ワクチン接種、薬局運営を行っており、一日あたり一五〇名から二〇〇名の患者を診療している。患者の大半は女性と子供で、地域住民に二四時間診療を継続している。

◎教育…七〇〇名収容のモスクと学校を開設した。ここには一四の教室と貧困学生のために滞在設備を完備した寮も併設している。二〇一〇年、地元機関に譲渡した。

◎井戸建設プロジェクト…深刻な旱魃がアフガン全土を襲った二〇〇〇年、井戸建設プロジェクトを開始。アフガニスタンとパ



PMSガンベリ農場で収穫した桃を手にするジア医師

キスタンの国境の町トルハムの井戸四本をはじめ、ソルフロッド、ロダット、アチン、ダラエヌール、ジャララバードに一六〇〇本を超す井戸を掘削した。また揚水ポンプと発電機を備えた灌漑井戸一四本も建設した。

さらにダラエヌール郡のカレーズ（地下用水路）三八カ所を復旧。これらはナンガラハル州住民の生活に大きく役立っている。

◎灌漑部門…二〇〇三年に開始した水路建設プロジェクトはジャリババからガンベリ砂漠まで全長二五キロメートルに及び、三

千五百畝の土地を灌漑している。

◎農業部門…ガンベリ砂漠横断水路の開通と同時に、農業事業をダラエヌールからガンベリに移動。ガンベリでは試験農場用にアフガン政府から約二〇〇畝の土地を供与されたが、同地は砂地であったため砂除去作業を始めた。およそ二〇〇ジェリブ（一ジェリブは二〇〇m²）で砂を除去し、もつとも土質の良い部分を検査したところ、農業に適しているとの結果報告が出た。同地でもまさに「緑の大地計画」の重要部分、ガンベリ砂漠開拓を開始しているところである。二〇一四年には七ジェリブの土地に五〇〇〇本あまりのオレンジの木を、同年秋には二〇畝にスイートオレンジを植樹する予定。スイートオレンジは、いづれ合計三万本を超える予定である。また家畜飼育プログラムも本年中に予定している。

既存水路の改修・新設部門

ここに述べる全事業はドクター・サーブが監督し、その他の関連事務事業は私達PMS委員会が管理している。

◎シェイワ取水口…シェイワ地区住民を援助する目的で、二〇〇七年一〇月に取水口建設を開始。二〇〇八年三月に完了し、住民およそ六万人が本水路の恩恵を受けている。

◎カマ第一取水堰…本事業は二〇〇八年一

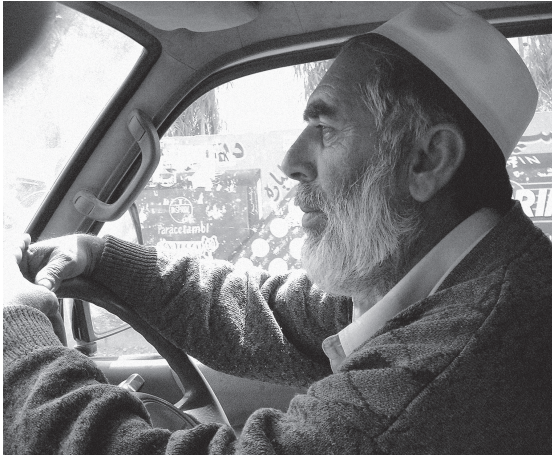
二月に着工、二〇〇九年二月に完了。三村落、人口およそ数万人、約一千畝の土地に灌漑水を供給している。

◎カマ第二取水堰…二〇一〇年一〇月に始まった本事業は主要部分が完了し、改修を繰り返して小さな工事を残すのみとなっている。五二の村落、六千畝の土地を灌漑。本事業はナンガラハル州住民に多大な恩恵を与えている。

◎ベストド護岸…二〇一〇年八月着工。クナル川の大洪水から三三〇〇世帯と一五四〇畝の土地を守った。

◎ベストド取水口…本事業は二〇一一年四月に開始し、住民およそ一〇万人がその恩恵を受けている。

◎カシコート取水口、護岸、水路事業…カシコートには二七〇〇世帯が住み、合計二五〇〇畝の灌漑用地がある。本事業は二〇一二年一〇月に着工し、完成すれば対岸のマルワリード堰との連続した堰となる。あとはベストド第二堰のみとなり、ベストド、カマ、クズクナルの三郡全体に安定した灌漑水を供給できる。ドクター・サーブが事業の先頭に立って指揮監督しているため全ての作業が順調に進んでおり、各現場監督もドクター・サーブを敬愛している。またドクター・サーブは日本およびアフガニスタンの関係者間の良好な関係づくりにも努めてPMS組織運営に貢献している。



信頼の厚いグラム・ナビ運転手

一運転手として二五年、
幸せを感じています

PMS職員
グラム・ナビ

私は、アフガニスタン・ナンガラハル州
カマ郡・ピルザイ村の住民ミール・アブド
ル・ワドウドの息子でグラム・ナビと申
します。私が中村先生が設立されたPMS
で仕事を始めたのは一九九〇年のことで、
病院の運転手職に就きました。PMSは当

時アフガニスタンのプロジェクトとパキス
タンのプロジェクトの二つで構成されてい
ました。アフガン・プロジェクトには、ペ
シャワールにJAMS病院、アフガニスタ
ン東部山岳地にダラエヌール、ダラエビー
チ、ダラエワマ診療所があり、パキスタン・
プロジェクトは、ペシャワールにPLS病
院（一九八八年JAMSとPLSが統合さ
れPMS基地病院となった）とパキスタン
の北西山岳地ラシュト、マスツージ、コー
ヒスタンに診療所がありました。私は、マ

ルワリード水路プロジェクトや、カマ、
カシコート、シェイワ、ベスードの取水
堰、ガンベリでの農業計画などPMSの活
動全般に運転手として従事しています。こ
れまで中村先生と一緒にずっと仕事をして
きました。PMSの仕事は忙しいですが、
アフガニスタンの人々のことを思うと幸せ
です。また日本のスタッフのみなさん、支
援して下さる方々、ことにドクターサーブ
中村には心から感謝しています。
感謝をこめて。

ワーカー通信

宗教・人種・国籍を
超えた病院だった

ペシャワール会事務局・現地連絡員

村井光義

先日、ペシャワールのPMS病院の事務
長であったイクラムラ氏から電話があっ
た。PMS病院は山岳医療過疎地の基地病
院として、一九九八年に日本からの寄付に
よって開院された。治安の悪化で日本人の
滞在が難しくなり、二〇〇九年七月には、

イクラムラ氏が起ち上げた医療NGOに譲
渡された。
イクラムラ氏はいつも厳しい表情だが、
ユーモアのある方で品のある冗談を言う。
PMS病院で一緒に働いていた頃は、日本
人ワーカーの誕生日を記録し、誕生日当日
には、内緒でケーキを準備して、ジヤ先生
や他のワーカーを集め、内線で深刻な内容
の作り話をして部屋に呼び、驚かそうとし
ていた。今でも、私が日本にいてもジヤラ
ラバードにいても定期的に連絡がある。ジ
ヤラバード事務所電話を受けた際にジ
ヤ先生と代わると、お互い懐かしい声を耳
にして楽しそうに話していた。「宗教、人

種、国籍が違うにもかかわらず、あの病院は素晴らしかった。」電話の後、ジア先生は決まってこの言葉を口にする。

ペシャワールからジャララバードへ異動になった職員が集まるとペシャワールを思い出すことがある。

以前、その一人のヌールモハマッドと事務所を話していると、病院の会計で働いていた二人（シャザードとシャヘイド）に電話しようとなった。彼らは日本人が引き上げる直前まで一緒に働いていた。診察券を配る担当だったヌールは、会計と関連する仕事が多く、年も近かったので仲がよかった。彼らと話し終わると、満面の笑みの中で少し真面目な表情をして、やはりジア先生と同じようなことを言い、懐かしがった。現在は皆それぞれの場所で活躍している。

●ワーカーOB近況報告

とても大きなもの
一部であったことを実感

元・PMSワーカー

蓮岡 修

私の人生の大切な力

私が主に関わらせていただいたのは、一

今年三〇周年を迎えるペシャワール会。私はその一部に参加しているだけだが、パキスタン・アフガニスタン・日本に住む多くの方々の協力を目の当たりにしている。PMS病院の入り口に掲げられていた記念碑に中村先生はこう書かれていた。

本病院は多くの日本の寄付者とアフガニスタン・パキスタンの人々の献身により、ハンセン病を初め恵まれぬ患者のため、建設された。

ここに民族を越えて平和と融和を掲げ、以て日本とパキスタン・アフガニスタンの良心の証しとする。

平成十年四月二十六日

二年以上も前で、それもほんの僅かな時間だった。だが私の中で変わらない風景や思い出があり、それがやはり私の人生の大切な力になっている。そんな風景を語りたいと思う。

水不足が深刻になった二〇〇〇年夏、その調査のため今までペシャワールの病院でのんびりと働いていた私は中村医師について調査に向かった。最初に訪れた村は、本来は水が豊富で、山脈から栄養分の豊富な泥水が降りて流れることから「赤い川」と

いう意味のソルフロッド村。その大農業地帯が、荒野のように枯れて、住民たちが行列をつくって水を運んでいた。牛やヤギが、草が少なくてやせ衰え、少女たちが争って水を汲んでいた。

「この涸れた井戸を再生する」

確かそんな中村医師の言葉で水計画が始まった。

身の丈の作業からスタート

涸れた井戸を掘りかえして、多少の水を確保する。あくまでも一時的な水の確保。

この緊急時に対処して、数ヵ月から半年後に訪れることが予想される大手NGOの支援ラッシュを待つ。それから先は彼らの持つ潤沢な資金と機械力で何とかしてくれはす。井戸を掘るなど大それたことは一切考えず、目立たぬように再生をして、手を引く。それが、その時に立てた戦略だった。井戸に関して素人の小さな団体の身の丈の作業。再生用の道具の配布を主眼に置いた計画が立てられ、たまたま自由に動ける私とその管理にあたることになった。

作業もまるで進化の歴史であった。

ドラエノール地方では、地下に巨石があり、再生作業が思うように進まなかった。当初、巨石が出てきた場合は、その地方で有名な大男が呼ばれる。二m近い大男で、彼がハンマーを振りかざして巨石を叩き割



井戸掘削現場での蓮岡O B (右上。2002年4月)

る。村人はそれを見守る。鉄杭などを使って人間が石と格闘する。しばらくして石が割れると、村人は手を叩いて彼を褒め称える。村の時間と仕事の意味がきちんと生きていた。

数カ月後には、巨石に対して巨石専用の滑車が登場した。巨石に直接滑車をとりつけ一方の端を地上で固定し、もう一方の端を滑車で引き上げる。中学一年生で習う重滑車を応用して、数トンの石を滑車二台で上げて見せると、村人たちは驚きすぐに応用して巨石を引き上げた。さらに重いものは滑車を一段増やすことで子牛程の大きさの石が持ち上がるようになった。

それでも穴をふさぐほどの大きな巨石や数キロに渡って地下に広がる厚さ二mくらいの岩盤層に当たれば、作業は中断せざるを得なかった。その頃、ゲリラ時代に爆破を担当していたコマندان（隊長）という通り名のスタッフが、掘り起こされた地雷から火薬を摘出して、空気圧縮型削岩機で開けた穴にそれを幾種類も混ぜて爆破する方法を完成させ、巨石だけでなく岩盤も突破できるようになった。

自然と人間のパイプ

井戸の工程は、流れ作業で行われる。

二年目からそれらの石を集めて分類を始め、その石のコレクションから、掘削によって出てきた岩盤層のどのくらい下に水を含んだ層があるか、おおよそ予想がつくようになった。

井戸も一本一本に個性がある。染み出す時間の早いもの、遅いもの、気温の影響で水位が上下するのもそれぞれ違う。その一番水位が減った時期を予想して、村人による掘削、ウォーターポンプによる吸水と専門掘削員による掘削、井戸枠降ろし、上部井戸施工、ハンドポンプ装着と五工程の流れ作業を開始する。それを監督するエンジニアの技術も向上し、複数の基地を作って作業地を拡大させた。

命の水を与えてくれる井戸は、まさに自

然と人間とのパイプだった。村人とチームを組んで完成させた井戸は本当に美しく愛おしいものであった。

乾いた大地。水がなくて難民化していた村で作業を始めると、労賃が得られるので村人が帰ってくる。死んだ村に活気が戻る。水が出て生活ができるようになる。つと人が帰ってくる。井戸が完成すると小さなお茶会をやつて、お坊さんが儀式をしてその完成を祝う。

井戸を作ったのは誰だったのだろうか。村人か、我々のチームか、または、中村医師か、それとも日本の支援者か。その時、年離れたムッラーが厳かに宣言する。

「このたびは、すばらしくも、アツラーのお力によつて井戸が完成した」

そこにいる皆が心から納得する。私たちはみなアツラー（神）の手の一部であった。

雨も早魃も、突然現れた食えない日本人の集団も、その時、私自身も大きな何かとても大きなものの一部であったことを実感した。

日本もまた乾いた大地

あの仕事は何だったのか。確かに現場は離れたが、あの頃と同じ仕事を私は今でも違う場所で行っているように思う。

あれから紆余曲折をたどり、現在、絵本を扱う小さな店と、併設した小さな子育て

支援の広場を運営している。また、真宗僧侶として法務も執り行う。

身近な日本にも同じように広がる乾いた大地に、命を支える水を得る井戸を掘っていくような仕事と信じて日々悪戦苦闘を続けている。

温暖化が進み、井戸の水位もあれから更に低くなったと聞く。だとすれば、かつて殉死者まで出して掘った井戸が何本残っているだろうか。メインテナンスが適正に行われていないほとんどの井戸は涸れてしまっていると思はれる。

中村医師に宿命があったように、あの時期に関わってしまった私にもいつのまにか宿命が生まれたのかもしれない。もし、後二〇年くらい経つてもまだ井戸が必要な生活が村に続いていたら、せめて殉死者がでた井戸だけでも、再生をしに行きたいと思っている。

次に行くときには、恐らくかつて私たちが進めたように、見捨てられた井戸を叩き壊して再生をするのだろう。老人になったかつてのスタッフを集めて井戸を掘るのは大変だと思う。彼らはまた一緒に働いてくれるだろうか。私もそれに向けて体力は保たなければならぬ。

本当に貴重な仕事に関わらせていただいた。中村医師や支えていただいた会には心から感謝をしている。この場を借りてお礼

を述べたい。

本来にありがとうございました。支援をこれからもよろしくお願いいたします。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円がかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄付をお送り下さった郵便払込用紙は、郵便局からコピーで届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々は発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼寄付をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

サファル・バヘル！（良い旅を）

甲斐大策

18

アジ・バラフトは長女を伴ない、亡父の故郷、アフガニスタン東端のバクティア州アリヘルを訪れた。国境を越えようと、かつて米国支援で建造した橋が崩落して、運良く養蜂中だったアリヘルの知人が車を預かり、驢馬を貸してくれた。橋を落としたのは米国の空爆だった。夕刻父娘は、アリヘルを見渡す高みに立った。サンソウバイやパーブナ他野草の香り一杯の涼風に、娘の表情が和む。

バクティアは、スレイマン山地の支脈末端が、岩だらけの丘陵を無数に生み、犇めき合い、そこを大小の谷が抉り、洞穴を穿って拡がる一五〇km四方の巨大迷宮である。昨今、神と鳥のみが俯瞰してきた大地を空中巡察する道具が出現しかし迷路の解明は敵わず虚しく退散する。畑地も樹林もないこの地に何故生きる、と訝る者は多い。剛直一途な鄙の者、との嘲りをどく吹く風と頓着しないバシウトウン達が、バクティアびとを野卑な自民族の恥、と誘う。

父の仕事柄アジはカーブルで誕生、流血の政変や旧ソ連軍の侵攻を眼にし、人々と共に脱出し難民化する中で少年期が過ぎ、飢えと戦闘の中で青年期から成人、父が没して後はドバイへの出稼ぎだった。

混乱の国情と飢饉に諸外国勢力の去来は、人々に苦難と心の裂ける苦しみのある三十余年を強い、TV、パソコン、携帯、ジーンズとスニーカーが居座った。そして更に救い難い日々が重なる。

元来アジにアリヘル魂もバクティア魂もなく、況して国家意識などはない。夕闇迫る集落へ下つてゆくアジに帰郷の感慨はなかつた。ただ、戦場で戦士団が、バクティア万歳、と絶叫した折の血の沸騰した感覚が一瞬、甦った。アザーンが聞こえる。この地に電気が届いていない。父娘の血の故郷といえ、アリヘルで縁談が進む娘の将来を思うアジの心は、深い所が塞がった儘だった。

註1 ラヴェンダーに似た香草

註2 カミツレの一種

●事務局便り

*ペシャワール会の総会は毎年六月の第一土曜日ですが、今年の六月七日で三〇回を迎えることができました。七日は、午前中に理事会、総会、午後からは現地報告会が行われ、三〇周年記念懇親会にも全国から百名ほど駆けつけて下さいました。ありがとうございます。

*三〇年を振り返ると、会員数三〇〇人という時期もありましたが、現在の会員数は一万三二五〇人で、寄付総数は二万八千件を超えています。興味深いことは、バブル経済の崩壊、9・11事件、リーマンショックという、世界的な事件・経済破綻を超えて会員数が増えていることです。世界が虚構に向かうほどに、会の現地活動への関心と共感が高まってきていることではないでしょうか。

*現政権によって「集団的自衛権」の行使容認が閣議決定されようとしています。それに関する中村医師への取材が集中しました。お伝えしたいのは、私たちの現地活動が守られてきた要因のひとつは、(政府レベルでも)日本が民生支援を前面に押し出し、国際的な紛争に軍事的に関与してこなかったということです。それを「解釈改憲」という手法で強行することは日本への信頼を揺るがす危険なことです。「集団的自衛権」の行使された結果がアフガニスタンの惨状であり、欧米軍の敗北・撤退であることを肝に銘じ、民生支援に専念すべきではないでしょうか。
*本文中にあります、一連の取水方式(PMS方式)は、現地の人々によって「中村方式(ナカムラタリカア)」と名付けられました。

◎村から

アーリーリタイヤして福岡に帰郷した昨年からは事務局に出入りさせていただき、三カ月に一度の会報発送作業を中心にお手伝いしています。三日がかりで発送する二万通近い封筒は、郵便局に渡す衣装ケース大のコンテナで八〇個分くらいの量がありますが、事務局ボランティアの八割以上は女性なので、封筒がぎっしり詰まった重いコンテナを運ぶ力仕事等に重宝されています。郵送料の半分以上は、会員の皆さんからご寄付いただく切手で支払っています。もし皆さんのご自宅にも、昔収集していた今は引出しの中で眠っているだけの切手があれば、ペシャワール会に寄付していただませんか? (YA)

◎職員募集(会計・事務職員を募集しています)

勤務地:ペシャワール会事務局(福岡市)
業務内容:アフガニスタン現地事業に関する会計・事務

応募資格:ペシャワール会の活動に関心のある方
PC基本操作ができる方/日常会話程度の英語が話せる方/二〇代男性(若年層の長期キャリア形成をはかるため)

●応募方法 履歴書を募集担当者宛に郵送して下さい。追ってご連絡いたします。待遇等につきご質問などがある場合はお問い合わせ下さい。
ペシャワール会事務局内 職員募集担当まで
(直通) 092-731-2388 (11時~19時)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 【5刷】1800円

辺境で診る 辺境から見る 【3刷】1800円

医者 井戸を掘る 【12刷】1800円

医は国境を越えて 【6刷】2000円

ダラエ・ヌールへの道 【5刷】2000円

ペシャワール会にて 【8刷】1800円

アフガン 高橋修・編著
農業支援奮闘記

農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録 2500円

聖愚者 甲斐大策
の物語 1800円



福岡市中央区渡辺通2-3-24
石風社 電話092(714)4838

人は愛するに足り、
真心は信ずるに足る

アフガンとの約束
中村哲/澤地久枝(聞き手) 2000円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話03(5210)4000

価格はすべて本体価格(税別)です

会 則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE
(〒八一〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル六〇三号 Ⅱ) 〇九二―七三二―二三七二) 内におく。